

## 「説唱芸能＜唱南游＞の語り」 続編Ⅱ

訳・廣 田 律 子

※9号・10号に引き続いて訳を試みる。

この「夫人伝」に二人の青田の人の話をしよう。城門のほとりで白羊を売る。

### 台詞

青田人は温州まで白羊をつれて、朔門のほとりの春生米屋の門口に置いた。その地方の人たちは白羊をぎっしり囲んで、きれいな白羊だと言う。白羊は妖気が断たず、ほめられると、尾を振ったり、毛を震わせたり、爪先で地をつかんだりする。こう話しているうちに、張員外がやって来た。張員外は朔門の店から来た。今皆羅浮林のことを話す。唐代年間、張員外の家は豪富で、銀がたくさんあり、人品もよかった。「皆さん、今日は！」彼は言うのと、「員外、今日は！」と答える。「皆さんは何を囲んで見ているか。」「羊を買うのだ！」「密造塩を売るのね。」

「おお！員外は何を言っておられるか。そんなことを言うなら、員外には話さないよ！羊を買うことだ。その羊はとてもいい！お買いなさい！」「俺の家には、もう二、三匹飼っている。」「お宅なら四匹飼っても多くないだろう。」

「そうね、それを買おう。いくら銀か。」「盧山の神娘が舟代としてわたしたちにくれた。一両二銭の銀だ。」と青田人は言うのと、「端数の小銭を言わないで、一両にしよう。」と員外は答える。

「神娘からもらった舟代だから、一両二銭で一銭もひけない！」

ある人は「二両四銭にも値する！」と言い、ある人は「四両八銭にも値するのだ。」と言う。

員外はその羊を買った。青田人は銀を受取り、員外は羊をつれて帰る。

そこに立っているある人は「その羊がここで売られたから、この地名を売羊巷にしよう！」「いけない！この地名はよくない！後に人に聞き間違えられて売娘巷と言われたら耳ざわりよくないから、後垺巷と言うようにしよう。」

### 歌う

やはり后垺巷と言う地名がいい、この地名は万古まで伝わって行く。

売羊巷は后垺巷と改名し、青田の女の船頭は二人いる。二人は銀を分ける。

台詞

下河灘で一両二銭の銀を神娘からもらった。羊も一両二銭で売ったから、それを分けて使おう。彼女たちはその銀を敲いて分けようとする。

歌う

二人はちょうど銀を敲いて分けようとしている処で、下河灘でもらった一両二銭の銀はもともと紙銭の灰の化けたものなので、ちょっと敲かれるなり、全部塵埃となった。

忠直無私で不平を言わずに、青田に帰ってこの事を放っておく。

張員外は羅浮の自宅に、白羊をつれて帰った。

員外は白羊を外につないで、部屋にいる婦人の客が近寄って白羊をよく見る。

その羊は妖気が断たず、見られると大喜びする。

台詞

爪先が地面をつかんだり、毛を震わせたり、口を開いたり、尾を振ったりして、いきいきしている。面白そうだが、黄麻の縄でつないでいるのは残念だ。金の鏈か、銀の鏈でつなげば、もっときれいだろう。金の鏈、銀の鏈が手もとにないから、先ず色彩の縄に取替えよう。一人は赤い糸を取出し、他の人は緑の糸を取出して、五本の色彩の糸で縄をなした。黄麻の縄を色彩の縄に取替えた。黄麻の縄は神娘に呪文をつけられたもので、色彩の縄は凡人のなった縄だ。

歌う

黄麻の縄が解けると、白羊はフーと一声を出して逃げた。

張宅の婦人たちはびっくりして、おや！羊が見えなくなった。

もともとその岫の地名があったが、改名して化羊岫という。

羊が化けてなくなったので化羊岫といい、今まで長く伝わって来た。

白羊は石門洞へ逃げて帰ったが、洞門が石碑で塞がれていて入れない。

神娘は俺の命を許してくれたが、俺の身を寄せる所がなくなった。

石碑で洞門が塞がれて洞に入らず、白羊は考えながら涙をほろほろ流す。

世の中に不運の者は多くあるが、どうして白羊の運命がこんなに苦しいのか。

俗世の鉢の花になるよりは、むしろ、冥土の一本の草になった方がいい。

水中に身投げすれば、三尺の水だけで充分で、首を括るなら、手拭い一枚で結

構だ。

白羊は石碑に向かってぶつかって、体はこなごなに碎けてしまう。

白羊の命は碎けたが、その妖気が風に吹き上げられた。

忠義な白羊は不幸に逢って、その生気が陳太陰の処につきあたった。

神娘は廬山の法でそれを知り、廬山の神娘はそのことをよく考える。

#### 台詞

ああ！その一陣の風が怪しい！神娘は竜鳳の占いを行って、おや！白羊が石門洞へ逃げ帰った。

#### 歌う

白羊は石門洞へ逃げ帰ったが、石碑が洞門を塞いで入れない。

白羊は自分の不運を考えながら、忠義な気持ちで石碑にぶつかって命を落した。

二人の將軍を遣わして、その白羊を洞祖神と命じる。

白羊は青田の石門洞で祭りを受けて、男女の衆人や村の平安を保つ。

外壇財喜馬一駕、白羊洞祖に命じて地方の安寧を保つ。

「夫人伝」にこのことはさておき、話を変えて、後にまた続けて語ろう。

次に温州永嘉県についた。八仙樓の辺に鄭宅がある。

金持ちの員外鄭文貴は、応氏を奥さんに娶った。

娘の鄭英は十九歳で、生れつき三分の神骨がある。

女の仕事を好まず、修行、読経をして道心をもつ。

鄭英は不運で、肺病の患者となった。

食を少し取るが、何のことも出来ず、喘いだり、痰を吐いたりして人を驚かす。

薬を飲んでも効かず、鄭英の病気はひどくなった。

占いをしてもらうと、不吉だと言われ、仏にみくじを求めても霊驗がない。

ある日、鄭英は思いめぐらして悲しく涙を流す。

不運な人は多くあるが、どうして鄭英の運命はこんなに苦しいのか。

ひどい病気をなおす薬もなく、薬を飲んでも効かない。

第一は天に頼り、第二は地に頼り、第三は日、月、星に頼る。

逢った凶事が吉事になり、平安になる時に、万本のよい線香で神さまにお礼をする。

悲みに沈んだ鄭英の怨んでいる気持は風に吹き上げられた。

神娘は盧山の法でそのことを思い知り、盧山の神娘はそれがよく分かった。

#### 台詞

神娘は竜鳳の占いを行って、温州府八仙樓の辺にある鄭宅のことが当たった。伯父鄭文貴、伯母応氏、鄭英お姉さんは十九歳で、生まれつき三分の神骨がある。不運で肺病にかかっている。すぐ助けに行かなければならない。「二人の將軍！」「はい！」「八仙樓の辺に行って、すぐ鄭英お姉さんを助けてやろう。」

#### 歌う

汪、楊の二将が道案内して、陳太陰は後について行く。  
八仙樓の辺の鄭宅につくと、門番の知らせで鄭員外に迎えられる。  
員外は迎えに出て、盧山の陳太陰を迎える。  
どちらからのお嬢さんか、どういう事でわたしの家に来られたか。  
家には大変な心配事があるから、皆さんを留める気にならない。  
わたしはお宅の心配事が分って、言わなくてもよく分る、と神娘は言う。  
鄭英お姉さんは、肺病にかかって苦しんでいる。  
食事は少し取るが、何もできず、喘いだり、痰を吐いたりして人をなやまして  
いる。  
薬を飲んでも病気がなおらない。いったいこの様子は本当か、どうか。  
どこからの少年が来られたか。一部始終をよく知っている。  
わたしは少年でなく、盧山の神娘はわたしの法名だ。  
途中妖気退治をして人を助け、わざわざお姉さんを助けるためにお宅に来た。

#### 台詞

「おや！神娘！失礼した。すいません、すみません！神娘！家の娘を助けるために何が入用か。」

「別に入用のものもないが、ただ五色の紙を買って来て、部屋の中に貼っておけば、肺病の魔を退治して、助けられるのだ！」

#### 歌う

員外は下男を遣わして、五色の紙を買いに町に行かせる。

## 台詞

鄭宅の下男が八仙樓の横町を出ると、当地の人に会った。「鄭宅のお嬢さんの病気はどうなったか。お医者さんに見てもらった方がいいだろう。」と言う。「沢山のお医者さんに見てもらった!」「どんな医者さんか。」

「有名な女医者だったよ! 始めの人は真丹仙、二回めの人は短命仙、三回めの人は送終仙というのだ。真丹仙は栄養の薬が必要だと言い、短命仙は熱性の薬が必要だと言い、送終仙は寒性の薬が必要だと言う。栄養の薬、熱性の薬、寒性の薬、いずれを飲んでも病気がよくなり、頭が痛く、目が眩み、昼夜苦しんでいる。」

「おお! 君たちはどこへ行くのか。」「紙を買いに行く。」「紙を買ってどうするのか。」「部屋に貼っておくのか。」「妖怪退治のためにそれを貼っておく。神娘が妖怪退治をすると言った。」

その地方の人はおしゃべりで、「肩に黄い風呂敷包みを背負い、手に竜角を持ち、廬山の法を話すあの女法師は世間を渡り歩いてご飯を騙して食べる者だ。彼女の言うことを聞いてはいけない。」と言った。「彼女は家の病気のことがよく分っているから、治療をためしてみる。」

「彼女は何の病気だと言ったか。」「肺病!」「肺病か!」

「肺病か! それは大変だ!」「彼女の話は病気に合ってるから、治療してみてもらおう。」下男は紙を買って来て、部屋の中に貼っておく。

その人たちは八仙樓の辺に来て、鄭宅の前でにぎわいを見る。しきりに員外、員外と呼ぶ。「神娘はお宅で妖怪退治するのね。妖怪をしっかりと捉えたら、皆に見せてくれ。皆見たいのだ、と神娘に伝えてくれ。」

## 歌う

鄭宅の門前に大勢の人が集まって、こみあっている。

## 台詞

ある人が前にわりこんだ時に、神娘はちょうどその部屋の中で妖怪を捉えている。雄の妖怪はすでにしっかりと捉えられ、雌の妖怪がまだ捉えられないうちに、その人は顎を窓の敷居に置き、口を開け、舌を吐出していたから、飛出した雌の妖怪を吞込んでしまった。

神娘はもとからその雌の妖怪を捉えようとしたが、その人が妖怪を見たがったから、つい吞込んでしまった。

神娘は、彼女を尊敬する人を加護するが、彼女を尊敬しないなら、加護されがたい！彼女は肺病の妖怪を呑込めば病気になることを知っていながら、それを退治しなかった。なぜなら、その人はどうしても見たかったから、呑込んだままになった。

肺病の妖怪を呑んだ人は、太平橋の両対沖巷の奥に住む白明という者だ。白明は肺病で死んだ、白明は肺病で死んだ！

### 歌う

その人は肺病の妖怪に害されて、俗世の小さな妖怪となって流浪する。

聖母は南を巡遊する途中で、その妖怪に逢って、法を行って退治した。

肺病の妖怪を遠方へ追立てて、いつまでもここを侵すことができない。

凶の星は三千里の外の遠くへ退けられ、吉の星は村里を明るく照す。

神娘は廬山の丹薬一服を取出して、鄭英に飲ませた。

桶一つを用意させて、鄭英をその桶の上に坐らせた。

腹の中の肺病の妖怪が下され、桶の中に落ちた。

その桶を野原で傾けて、火で肺病の妖怪を焼払う。

鄭英の病気が直り、鄭宅は太平になる。

内壇娘娘馬一駕、鄭太陰の病気がなおった。

鄭員外はこの様子を見て嬉しくなって、廬山の大恩人にお礼を申す。

妖怪を退治して、娘を助けた功労は大きく、何処からの方で、お名前は何と言うか。

わたしは福州侯官県の者で、父は上元、母は葛氏だ。

長兄は法通、次兄は法青、十四は三番目の者だ。

長兄は南江で妖怪退治のため蛇に害され、次兄はこの消息を家に知らせた。

長兄を助けるために廬山に登って、師に神娘と名付けられた。

廬山の洞で法を身につけた時に、師はわたしに言つけた。

洞を出てから、途中で先に庶民を助け、後に兄を助けてくれ。

男の人を助けてやれば、兄弟と称し、女の人を助けてやれば、姉妹と称してくれ。

### 台詞

「おお！神娘！家の娘を助けて下さったが、法を伝授してもらえないか。」「お嬢

さんに法を伝授して上げよう。彼女は肺病者だったから、誰かがその病気になって、彼女の前で祈願するなら、元気を取戻すように庇護してやればいい。」「神娘にお礼を申す！」

### 歌う

内壇娘娘馬一駕、鄭太陰は肺病のことを司る。

鄭宅は広間で祝宴を催して、盧山の陳太陰をもてなす。

鄭員外は銀千両を取出して、陳神娘にお礼を申す。

家の娘を助けた功労は大きい。どうしても何かでお礼を申したい。

神娘は謝礼を受取らない、お姉さんを助けるのはあたりまえのことだ。

後に南江で蛇退治の時に、お姉さんにお伝いを願う。

神娘はわたしの太恩人で、心より恩人を手伝ってさし上げたい。

内壇娘娘馬一駕、鄭宅の広間で法の本を写す。

写した本を鄭英に読ませ、神娘は別れを告げて旅立つ。

鄭宅の老若に見送られて、神娘は風呂敷包みを肩にかけて別れて行く。

内壇で紙銀三枚を捧げて、神娘と汪、楊の二将はそれを分ける。

次に温州の倉橋につき、倉橋の地方は幸運に恵まれている。

九匹の竜が集まって珠を争う地方だから、三回竜角を鳴らして宮の敷地にしるしをつける。

今後、神娘は悟りを開く時に、温州の倉橋の宮に降臨する。

内壇娘娘一駕、雲一片、温州倉橋の宮に降臨する。

神娘は朔門の外を遊覧し、海の辺に船頭たちがいる。

彼らの話しによれば、楠溪江には妖怪がいて、石階段の下に蟹の妖怪が現れる。

昼に川辺に伏して岩となり、夜に川の中に入って人を害する。

毎日夕方から夜まで、その妖怪川に入って人を害する。

小舟にぶつかって人を落して、お菓子として食ってしまう。

神娘が民衆のためにその妖怪を退治するように皆は願う。

### 台詞

神娘は、もともと妖怪に逢えばそれを退治し、困った人に逢えば助けてやるのだから、船頭たちの言うことを聞くと、すぐ海の沙洲の辺から一握りの泥をつか

み、一枚の花模様の手拭いに変じて出した。その手拭いで泥を包んだ。盧山の法の妖怪退治の呪文を唱えてから、その包みを船頭に渡して、「君はこの包みを持って、蟹の岩の上に置いて、『妖怪を斬ってくれ!』と一度叫んでくれ。外の言葉を言わなくても、妖怪退治ができる。」「本当か!」船頭はその手拭いの包みを受取った。

#### 歌う

神娘は一つの泥の包みを渡して、船頭が盧山の法を受取った。

夕方に舟を石の階段の下まで漕いで、泥の包みを蟹の岩に置いた。

「妖怪を斬ってくれ!」と大声で叫ぶと、盧山の法は蟹の妖怪を退治した。

千年の妖怪を滅ぼすべきで、万年の妖怪の種を絶つべきだ。

神娘は蟹の妖怪を退治して、石階段の辺が太平になる。

神娘は妖怪退治の功労が大きく、楠溪江のあたりは無事になる。

甌北の地に多くの太陰宮を建て、陳十四大聖を仰慕する。

この「夫人伝」に盧山の法のことはさておき、上文に述べたところを続けて語ろう。

「夫人伝」には、さらに范旦那のことを述べて行く。彼の魂は狸の奥さんに吸い取られた。

本を読むことも、執務も出来ず、近頃病気が非常にひどくなった。

薬を飲んでも効かず、病気がなおらない。

狸の妖怪は考えをめぐらず。

#### 台詞

おや! 范宅の役所で、役人の奥さんとはなんと身分が高いのだろう。心配することがないはずだが、ただ、心配なのは妖怪退治の大家である神娘のことだ。もし神娘がここを通るなら、妖怪は準備しなければならない。妖怪は指を折って占いをすると、おや! すぐ来るのだ! 早く逃げよう!

#### 歌う

早く逃げれば命を保つことができるが、でないと、命を落す恐れがある。

別に生きて行く道を開いた方がよいから、身をひるがえてこの危い処からぬけ出そうとする。

役所の戸を開けて、色彩の鳳凰のように飛出し、金の鏈を断って門を出て行く。



狸が金の鉤からぬけ出すように、何よりもさっさと逃げるのが大切だ。  
妖怪は前門から逃げようとしたが、前門には盧山の兵が鎮守している。  
妖怪は裏門から逃げようとしたが、裏門には子牛兵が鎮守している。  
妖怪は天上へ飛上ろうとしたが、上には天の籠が重たく覆っている。  
妖怪は地下へ入り込もうとしたが、下には地の網がしっかり張っている。

#### 台詞

「おや！占いが遅かった。大変だ！無事であるために、范旦那さんにしっかりすがって行くより仕方がない。」と妖怪は言った。

#### 歌う

考えをめぐらしている狸の妖怪は十八歳の娘に化ける。  
非常にきれいな美人に化けて、ゆっくりと部屋に入っていく。  
范旦那がベッドに横になっているのを見ながら、気をつけて近よって行く。  
青い綾の帳が銀の鉤にかかって、やさしい声でご機嫌を伺う。  
渴をいやすためにお茶を上げようか。お腹が空いたら、どんなお菓子が欲しいか。

旦那さまは早くお元気になるはずなのに、どうしてご病気がなかなかおらないだろう。

お腹が痛むなら、わたしが敲いてあげ、お背中が痛むなら、わたしがよく敲いて上げよう。

木の枝がまっ直に伸びたくても、まっすぐに伸びがたく、山が高くても四方からの風を遮りがたい。

風や雲は不運を払いにくく、嵐も上げにくい。

月が破れれば、金で繕うことが難しく、花を移す場合に糸でひっぱってはいけない。

この病気を直すために、仙人の薬こそ必要で、凡人なら仕方がない。

この地方に來た人物は運命で災難に逢うから、小宮は病氣になった。

天がくずれ落ちるなら、それを支える高い人がいるし、凶事に遭ってかえって吉事に変えることもある。

善人は神さまに助けられ、幸運が向いて来るだろう。

つまり、わたしは不運な者で、運命で旦那さまにつり合わないだろう。

運命で釣合わないから、タブーにふれた。

つまり、わたしは薄命な者で、旦那さまとはよい縁組とはなりにくい。

お前はやさしい人で、そんなに自責をしなくてもよい。

旦那さまに咎められないから嬉しい、お腰や背を敲いてあげる。

范旦那は不都合千万だ、やさしく妖怪を伴とする。

下役はこの事情が分ると、考えをめぐらした。

おや！大変な過ちだ、俺は大変な過ちをした。

そんな者の媒酌人になるべきでない。

### 台詞

家の旦那さんはいつも元気な顔つきだったが、今は骨の皮ばかりになった。陳医者さんに脈を見てもらったが、処方もくれない。「先生は、温州では第一人者だから、是非家の旦那さんを助けて下さい。」と俺が言うと、お医者さんは一枚の処方を書いてくれた。数十両の銀を払っても、効くかどうかわからない。何しろ飲ませてみよう。下役は処方を手に持って、役所を出て薬を買いに出かけた。道々彼は歩きながら考えた。ちょうど廬山の神娘が来た。おや！この人は心配そうな顔つきで、涙を流している。何事だろう。神娘は占いを行った。おお！范旦那の下役は主人の病気を直す薬を買いに薬屋へ行くのだ。「下役さん！下役さん！」  
「どこからの少年か、どうしてわたしのことを知っているか。」

### 歌う

下役さんと呼んで、聞いてくれ。お話を聞かなくても、わたしには事情が分っている。

お宅の旦那さんは南京上元県の人で、お名前は范公卿だ。

二十三才で通判に任じられて、温州の役所で執務する。

上級の役所の任務によって、役所の舟は川の砂洲あたりまで来た。

当地に、天台嶺という山があり、その園岩洞に妖怪が宿っている。

それは九尾狸の妖怪で、洞の中で八百年の修行を積んで来た。

妖怪は神娘が処州に来ることを知ると、一つもんどりを打って逃げて行く。

九尾狸は范旦那が必ず災難に逢うことが占いで分ると、女の人に化けて俗世に下る。

川の砂洲で悲しく泣いているのが、お宅の旦那さんにははっきり聞こえた。

下役のあなたを遣わして、妖怪に近寄って、いろいろ聞いた。

あなたは、お姉さんは何事で、こんなに悲しく泣いているかと聞いた。

母の側にいる娘か、それとも夫のあるお嫁か。

実家に争いがあって夫の家に帰りのか、それとも夫の家にごたごたが起きたから、実家に行くのか。

道に迷ったのか、来歴を訊ねてから家に送ってやろう。

妖怪は詰問されると、顔を赤らめて、まともな人のようにいつわる。

伯父さんは通りすがりの方で、お通りなさい。わたしのことを心配しなくてもよい。

あなたはこの妖怪の真面目な顔を見ると、神さまに祈って誓う。

天の霊、地の霊、諸々の神さまは証人となる。

妖怪はあなたのまじめな誓いを聞くと、やさしく話し出す。

役所の伯父さんは貴い方だ。災難に逢ったわたしのことを申し上げよう。

わたしの家は楽清の塩盤にあり、李姓で李戴金と言う。

七歳に父が亡くなり、八歳に母が亡くなった。舅父はわたしを家につれていき、育てた。

年寄の舅父と舅母が亡くなって、一人だけの従兄弟がある。

従兄は無理やりに、わたしを彼の嫁にしようとした。

夜更けにわたしは逃げだしたが、川に隔たてられて身をよせる処がない。

あなたは妖怪の話聞いてから、舟まで彼女をつれて行った。

あなたは前に立ち道案内して、狸の妖怪は後をついて行く。

埠頭を離れて舟に乗ると、その妖気が范旦那につきまとった。

旦那の心は惑わされてしまった。この仙人のようにきれいな娘は稀である。

顔が春の柳のようにきれいで、皮膚が玉のようにつやつやしている。

范旦那は彼女を絶えず称え、あなたは妖怪を船室に送った。

あなたは旦那が非常に喜んでいるのを見て、彼の媒酌人となる。

ゆっくり船室に入るなり、妖怪は立上がって迎える。

伯父さんは何事で、夜更けにこの船室に入って来られたか。

他のことでなく、お姉さんの縁組のために来たのだとあなたは言う。

今年おいくつか、媒酌があったか。

李氏は今年十八歳で、まだ婚約もしない。

旦那さまは未婚で、お姉さんも婚約していないから、旦那さまと縁組すれば好  
からう。

旦那さまは立派な役人で、災難に逢ったわたしは身分の卑しい者だ。

粗末な糠は精米と釣合わず、野草は牡丹の美しさにとても及ばない。

縁組には情義を重んじるもので、高いとか、低いとかを比べるべきではない、  
とあなたは言った。

旦那さまは卑しいわたしを嫌わないなら、わたしは甘んじてお腰や背中を敲い  
てあげよう。

あなたは彼女の言うことを聞くと、嬉しくなり、旦那さんに知らせる。

あなたは買物のために遣わされて、岸に上がって商賣人たちと値段を掛合う。

舟の中で祝宴を催して、妖怪との縁組を手配する。

夜が静まって三更になると、狸の妖怪は正体を現わす。

妖怪は旦那さんの旨い匂いを嗅ぎながら、彼の胸に一口で噛みついた。

三回旨い血を吸うなり、范旦那さんはびっくりして大声で叫んだ。

妖怪はこの様子を見て、どうなさったかとやさしく聞く。

旦那さまは何事で、夜更けに大声で叫ぶのか。

小官はわけが分からなく、この夜にこんなに苦しんでいる。

小官は以前に病気がなかったのに、今晚病気になったのは変だと思う。

つまり、卑しいわたしは薄命な者で、旦那さまと縁組になりにくいだろう。

お前はやさしい人で、そんなに自責しなくてもいい。

旦那さまに咎められないから嬉しい、お腰や背中を敲いてあげよう。

翌日に、舟が温州に着き、当地の役人たちは出迎える。

范旦那さんの病気が非常にひどく、読書も、執務も出来ない。

あなたはどこからの少年か、どうして一部始終を知っているのか。

盧山の玄妙な法を身につけた陳神娘だ。道中妖怪退治をして人を助けて来た。

#### 台詞

「神娘！失礼した！ご免下さい！ご免下さい！家の旦那さんを助けるのは大切  
なことだ。」「わたしはちょうど皆さんの役所に行って、妖怪退治して旦那さんを  
助けてやろうと考えている処だ。」と神娘は言う。

下役は旦那の部屋に行くと、旦那さまがベッドで寝ているのを見つけた。あの女もベッドに横になって、旦那の体を敲いたり、触れたりしている。どうしようかと下役は考えてから、書斎へ行って、一枚の紙切れに字を書いた。それから、旦那の部屋に戻って、ベッドの側で旦那の体を揺振って彼を起こした。持って来た紙切れを旦那の手に入れて見せた。

「他人の言うことを聞くなかれ。銀をむだに使わないでくれ。それは世間を渡り歩いて生活する女法師の騙す仕業だ。」と范旦那は言う。

「家の旦那さんは信じない。どうしようか。」と下役は言いながら客間に入った。「お宅の旦那さんは何と言ったか。」と神娘は聞く。「家の旦那さんは信じない。」「旦那さんはどう言ったか。」「あなたは盧山の法がない。本当に盧山の法があるなら、かごか馬に乗るのだ。あなたが世間の女法師で騙してご飯を食べるのだと言った。」「お宅の旦那さんはそんなに言うなら、死ぬ日を待つだけだ。彼が死にたいなら、わたしの盧山の法とは関係がない！わたしは盧山を出てから、無数の妖怪を退治して人を助けて来た。とるにたらない妖怪を残しても大したことはない。」

神娘はこう言いながら、外へ出ようとする、盧山の師の奥さんの話を思い出した。盧山を出てから、妖怪を見つければ退治し、困った人に逢えば助けてやれ、と言つけられた。それで神娘は我慢して客間に坐る。

家の中では妖怪が聞き出した。

#### 歌う

下役の持って来た紙切れに何か書いているか、と妖怪はまじめに聞いた。

その字をよく見て、本当のことを話して下さい。わたしに隠さないように。

#### 台詞

「お前！何事もない。俺は病気で煩わしいから、下役を遣わして城隍廟までおみくじを引いてきてもらった。おみくじは吉だった。それによって俺の運命はよくなるのだ。」

#### 歌う

下役の持って来た紙切れのことは分っているのに、おみくじとか言ってわたしを騙している。

わたしたち主婦は一心で、何も話せないことはないでしょう。

お茶などのお世話をいくらしてもむだなこと。もとからわたしを他人と見ているのね。

薄命なわたしはお役に立たないなら、この命を捨ててもいい。

川に身投げすれば、三尺の水で充分、頸を括るなら、手拭一枚でけっこうだ。

世間でつまらない人間とされるよりも、むしろ冥土のさっぱりした鬼になった方がいい。

お前は心配しないでくれ、俺は本当のことを話してやろう。

実は下役の紙きれには、聞きにくい言葉が書いてある。

お前が妖怪で、園岩洞の中の狸の妖怪だと言った。

盧山の法を身につけた神娘が、凡人を助けるために、この役所に来た。

お前が神娘に刺殺されれば、小官の病気はなおる。

お前が神娘に斬殺されないなら、仏に祈っても小官の病気はなおらない。

旦那さま、おめでとう、神さまが降りて旦那さまを助けるのは本当におめでたいことだ。

実に、盧山の法を身につけた神娘はこの役所に来て、凡人を助けるのだ。

わたしは本当の妖怪で、園岩洞の中の狸の妖怪だ。

わたしを留めてはお役に立たない、神さまに祈っても旦那さまの病気はなおりにくい。

わたしが殺されたら、奥さんになる人はあるが、旦那さまがなくなったら、世の中で償うことができない。

わたしが殺されることによって、旦那さまを助けることができないなら、わたしは冥土へ行っても残念に思う。

お前はやさしい人で、そんなに自責をしなくてもいい。

旦那さまに咎められないので嬉しい。お腰や背中を敲いてあげる。

范旦那は妖怪に惑わされて、やさしく妖怪を慰める。

盧山の神娘は彼らの話を聞くと、ぷんぷん怒った。

#### 台詞

「この妖怪は唇から口の息子を生み出し、口の息子が口の孫を生み出し、巧みなうまい話ばかり流し出すのだ。他人はうまい言葉が聞きたく、おだてに乗りたいたろうが、わたし神娘はうまい言葉を聞きたくない。その妖怪に惑わされている

范旦那はわたしが妖怪を殺すことは忍びないと思っている。わたしは范旦那と直に話そう。」と神娘は言う、すぐ部屋に入って范旦那のベッドの前に立って、大声で言った。

歌う

范旦那さん、范旦那さん、范旦那さん、范旦那さん！  
お宅の奥さんは人間でなく、園岩洞の中の狸の妖怪だ。  
わたし神娘に彼女を殺させれば、旦那さんの病気はなおる。  
そうでないと、旦那さんの病気はなおりにくい。

台詞

范旦那はこの話を聞かや、怒り出した。神娘は、今殺すよ、と言った。

歌う

どこからの世間を渡り歩く女か。こんなでたらめな話をするとは。  
明らかによい奥さんなのに、園岩洞の中の妖怪とか、全くとんでもないことだ。  
人間を害しても俺范旦那を害するだけで陳姓の者を害することはない。  
俺の親類でもないのに、なぜ俺のことによけいな世話をやくのか。  
さっそく外へ出てくれば、お互いに邪魔にならない。  
また何とか言って出ないなら、俺の恐ろしさを思い知らせてやるぞ！

台詞

「お前の命は十よりの縄の九よりが断ってしまったように危い処だ。またそんなに強情を張っているのだね。お前が死にたいなら、わたし神娘とは関係がない。わたしは廬山を出てから、無数の妖怪を退治して、多くの人を助けてやった。このつまらない妖怪は大したこともできないだろう！」と神娘は言った。

神娘はすぐ立上がって外へ出ようとしたが、廬山の師の言つけを思出すと、我慢して客間に坐った。妖怪はまたやさしく范旦那に聞いた。

歌う

他人の言うことを聞入れるか、どうかは、あなたのお考えによるもので、外来の人の機嫌を損ねてはいけない。

たしかに神娘は廬山の法の持主で、凡人を助けるために役所に来た。

わたしは本当の狸の妖怪で、園岩洞の中の狸の妖怪だ。

わたしを留めて恋恋としては、お役に立たない。旦那さまのご病気がなおりに

くい。

わたしが殺されたら、葱や韭のようなもので、旦那さまは瓦の上の霜のようだ。葱や韭が切られても、また伸びられるが、霜や雪が溶ければ、もう見えない。三つの目の女を娶ることはできないが、二つの目の女はどこでも見つけられる。緑の木に咲いた、きれいな花に、恋してはいけない。実った金色の枇杷をどっさりお摘みなさい。

范旦那は答えて、夫婦は同じ枝に止まっている鳥のようで、どの鳥が驚かされたからといって、自分だけ逃げるだろうか。

お前はやさしい人で、そんなに自責しなくてもいい。

たとえ、お前が妖怪であって、俺は惑わされて死んでもいい。

幸いに旦那さまに咎められないので、腰や背中を敲いてあげる。

范旦那は本当に惑わされて、やさしく妖怪を伴にする。

盧山の神娘は彼らの話をはっきり聞くと、心中から煙や火が吹出す。

#### 台詞

「この妖怪は本当に口先が旨い。范旦那は妖怪を殺すことを許さない。他の人はこれを許しても、わたし神娘は絶対許さない！先ず法を行って見せてやろう。」と神娘は言う。

「下役さん！一膳の水を持ってくれ！」と神娘は言う。「神娘！お喉が渴いたなら、お茶がある。」「わたしは宿命で水だけを飲むのだから、お茶を飲まない！」「怒らないで下さい。家の旦那さんはご機嫌を損なったが、わたしは失礼しなかった。」と下役は言う。「おお！わたしは本当に水しか飲まない。早く水を持って来てくれ！」「水を持って来て上げよう、すぐ来るよ。」

下役は一杯の水を持って来て、神娘に渡した。神娘はその水を受取ってから、呪文を唱えて一口飲んだ。そして、范旦那のベッドの前に来た。

#### 歌う

呪文をかけた水を一口吹き出すと、妖怪はびっくりした。

百本の弓の矢が妖怪の体に刺さって、妖怪はずきずき痛んだ。

妖怪は驚かされて慌てて、急いで逃げ出す。

神娘は法を施して、役所から外へ逃げ出した妖怪を追いかけて行く。

妖怪が上へ逃げようとしたが、上には天の籠があるから逃げられない。



妖怪が下へ潜ろうとしたが、下に地の網が妖怪を遮っている。

妖怪が東方へ逃げようとしたが、東方には廬山の兵が妖怪を遮りとめている。

妖怪が振返って南方へ逃げようとしたが神娘は丙丁の訣で妖怪を打つ。

妖怪は体をひるがえし、西方へ逃げようとしたが、神娘は庚申金で妖怪を焼く。

妖怪が北方へ逃げようとしたが、神娘は訣を打って、深い大海が現われる。

妖怪は懸命に水にもぐろうとしたが、地の網が地下をしっかりと覆っている。

四方とも遮られて逃げられない。妖怪は逃げれば逃げるほどあわてふためく。

つい、一つの計略が浮かんで来て、廬山の玄妙な法と戦おうとする。

強いて元気を出して妖の法を施し、その妖の法も人をびっくりさせる。

妖怪が土の中へ遁げる八卦の陣をしくと、神娘は岩や洞をこわして妖怪を捉えようとする。

妖怪が急いで後へ退いて行くと、神娘は法を施して前へ進んで行く。

妖怪が巽乾坤を使うと、神娘は未坤申の法を施す。

妖怪が五行の陣をしくと、神娘は六甲で妖怪をびっくりさせる。

妖怪があせり出して戦いながら抜いた、一握りの毛が千百万の狸の子に化けて、神娘を迷わせようとする。

神娘は雷火の訣を打って、狸の妖怪の子孫を焼払う。

妖怪は妖の法を全部使い尽しても、廬山の玄妙な法にかなうことができない。

神娘は千斤の呪文を唱えて、金の鉤を放り出して妖怪を吊った。

金の鉤がしっかり妖怪を吊って、狸の妖怪は正体を現わす。

神娘は意識をとりもどす訣を打って、范旦那を覚醒させた。

神娘は婉曲に言って、范旦那に慰めて聞かせる。

范公卿、范公卿、もともと一人の役人だ。

好色で妖怪につきまとわれた。読書人として何と愚かだろう。

温州に来て、役人として執務するはずなのに、下河灘で妖怪につきまとわれた。

妖怪を美人だと思って、自分の夫人にした。

毎日気持ちよくっついて、妖気を受けて病気になった。

わたしは何度もはっきり話して上げても、旦那さんは妖怪に惑われて、わたしの言うことを信じなかった。

今、もう狸をしっかり捉えたから、目を醒まして、よく見てごらん。

台詞

范旦那が身を起して見ると、おや！この妖怪か！口は尖り、尾は長く、足の爪先は釘のつけた熊手のようだ。体中いっぱい黒っぽい毛は恐ろしい！

歌う

范旦那は身を起して、はっきり見ると、元気を出しながら、可怕がった。  
神娘は狸を前へ動かして、狸の足の爪先が范旦那の額に突あたった。

台詞

盧山の神娘は笑いながら言った。「范旦那さん、これを殺してもよいか、どうか。殺したくないなら、ここに残しておいてもいい。」

歌う

范旦那はびっくりして頭がさえた。ぷんぷん怒って、この妖怪を殺してくれと叫んだ。

盧山の神娘は金の鉤で、八百斤の狸を吊った。  
一本の神剣を振回すと、狸の首を断って血まみれになる。

台詞

「下役さん！茶碗三つを持って来てくれ、狸の血を三杯盛り入れるから。」と神娘は言う。神娘が剣で妖気を払った狸の血を范旦那に飲ませると、彼の病気になる。妖怪の尸を役所前の橋の端までひっぱって、杉の木で組立てた棚にかけて、衆人に示す。七昼夜衆人に示した。

下役は三杯の血を范旦那に飲ませる。「旦那さんは下河灘で、妖怪に三回血を吸い取られたから、三杯の血を飲めば病気がなおる。」と神娘は言う。范旦那は始めの一杯の血を飲み、第二杯の血も飲み、第三杯を飲みながら、彼は明らかに妖怪の血なのだと思って、吐き出した。

歌う

一口の血が地面に落ちると、役所の広間の地面が真赤になった。

台詞

「君、俺の体はまだ痛い！」と范旦那が言うと、下役は神娘に聞く。「そこにある一本の棒を持って旦那さんの体を軽く推敲いて上げれば、よくなるだろう。」と神娘は言う。

「あの棒が役に立つかどうか、君は神娘にちょっと聞いてくれ。」と范旦那は言

う。

下役が聞き出すと、神娘が口を開かないうちに、二人の将は先に言った。「用意のためにそこに置いたらいい。」

歌う

二人の将の言う通りにした。范旦那は今の出来ごとを考える。

台詞

狸の尸を役所前の橋の端に置いて衆人に示す。七昼夜が過ぎると、綿で狸の尸を包んでから、油をつけて、一本の大きなろうそくにした。

歌う

役所前の橋の端で狸の尸で作ったろうそくを燃やして、温州の役所あたりは太平になる。

凶の星は三千里をこえる遠方へ退き、吉の星は役所を明るく照らす。

台詞

范旦那は絶えず神娘を称えて、「神娘！わたしに法を伝授して頂けないか。」と聞く。「旦那さんに法を伝授して上げよう！願かけの帳面や役人のことを司ってくれ。」「神娘にお礼を申す。」

歌う

内壇小衆神一駕、役人のことを司る范旦那。

范宅は広間で祝宴を催し、盧山の陳太陰をもてなす。

小官を助けた功労は大きいから、どうしても何かで神娘にお礼を申し上げたい。

お気持はよく分った。木を買って宮を作ってくれればいい。

神娘は悟りを開いた時に、温州のこの宮に来る。

内壇娘娘一駕雲一片、温州に多くの太陰宮が建てられた。

何のお土産も受取らないなら、小官はこのことをいつも心にかけておく。

神娘は謝礼を受取らず、旦那さんを助けたのは当り前のことだ。

後に南江で蛇退治の時に、旦那さんに助けてもらいたい。

神娘はわたしの大恩人のお姉さんで、大恩のお姉さんを助けるのは当り前のことだ。

内壇小衆神一駕、范宅の広間で法の本を写す。

神娘は盧山の法を伝授して、范旦那に法の本を伝授する。

神娘は黄い風呂敷包みを肩にかけて、范宅の老若に見送られる。  
内壇で紙銭三枚を捧げて、神娘と汪、楊の二将はそれを分けてもらう。  
次に南門の外についた。巽山には白鶴の妖怪が現われた。  
神娘は竜鳳の占いをして、つまらない妖怪が崇まっていることが分った。  
神娘は金の銚を放り出して、白鶴の妖怪を斬殺す。  
大きな妖怪は神剣で殺すべきで、小さな妖怪は神鞭で塵埃にする。  
火で妖怪を焼払って跡もなく、巽山の地方は太平になる。  
通った梧誕頭板橋では、子魚の祟りが百姓の生活を乱している。

#### 台詞

梧誕頭板橋では、重さ二、三斤ほどの一尾の子魚が崇っている。曇る日の午の時刻の前に、その水魚が淵の岸で寝ついているふりをする。不運な人がそれを見つけると、捉えようと手探りしながら、水の深い処まで進んで溺死してしまう。こうして多くの人が害された。

#### 歌う

神娘は竜鳳の占いを行って、神鞭で子魚を殴りつける。  
千年の妖怪を滅ぼすべきで、万年の妖怪の種を絶つべきだ。  
神鞭で一度だけ殴りつけると、小魚がこなごなになってしまう。  
雷火で妖怪の尸を焼払って跡もなく、梧誕頭板橋の地は太平になる。  
次に白象橋頭の地についた。白象橋頭は幸運に恵まれている。  
九匹の竜が集まって珠を抱えている地方で、三回竜角を吹鳴して宮の敷地のためにしるしをつける。  
その後、神娘は悟りを開く時に、白象橋頭の宮に来て太平を保つ。  
内壇娘娘一駕雲一片、白象橋頭に太陰宮がある。  
次に端安の魚潭の地方についた。この地方にも妖怪が現われた。  
この地に現われたのは他の妖怪でなく、金魚が崇って百姓を害している。

#### 台詞

端安の魚潭では金魚が崇っている。ある家には、かめで金魚を飼っている。そのかめを娘に部屋の窓の下に置いた。その娘は毎日食物や唾などを金魚に食べさせた。いつもこうしているうちに、金魚が陽気を持つようになったが、その娘は陽気を吐き尽してしまった。

## 歌う

唾を吐き尽して陽気がなくなって、死んで閻魔の宮に行った。

## 台詞

彼女は死んでから魂が散らず、昼に太陽に照され、夜に玉皇の露を受け、丹藥を煉り、崇って人を害する。彼女は普通の人を害さず、もっぱらぶらぶら遊んでいる人を害する。この妖怪は常に一人の娘に化けて、橋の袂に立つ。温州へ行く人を見つければ、「お兄さんは温州に行くのか。わたしは温州に行きたいが、道が分からないから、温州までわたしをつれていってもらえれば、本当に有りがたい！」と言う。

道を通る人たちはまちまちだ。心の正しい人なら、「お妹さん！口で聞けば道が分る。聞きながら行けばいいだろう！」と言う。ぶらぶら遊んでいる人なら、この娘を見て、心も痒くなる。こんなきれいな娘がこの寂しい処で俺を待っている。俺は彼女を家へつれて行って嫁にしよう！「お姉さん！俺は温州までお姉さんをつれて行こう。」と彼はやさしく言う。本当に彼女をつれて行く人で、亡くなってしまった者は少くない。間抜けになったのもあれば、病気で死んだものもある。

ある日、神娘がそこを通ると、彼女に呼びかけられた。

神娘は、こんな妖怪は珍しくない、金華の橋の袂にあった馬の妖怪みたいだ、と思った。

## 歌う

神娘は竜鳳の占いを行って、これが金魚の妖怪だと分った。

摘んだ一枚の荷の葉が魚を入れるかごに化けて、神鞭で金魚の妖怪を捉えた。

千年の妖怪を滅ぼすべきで、万年の妖魔の種を絶つべきだ。

呪文を唱えて金魚の妖怪を降服させ、いつまでも人を害することは許されない。

金魚の妖気を払って、魚潭の地方はいつまでも太平になる。

次に瑞安県についた。瑞安県は太平の地方だ。

神娘は県内の景色を賞でて、ここの百姓がどんな人たちかと試してみる。

東門を通ると、お茶が出され、南門を通ると、お菓子が出される。

西門を通ると、夜食にひき留められ、北門を通ると、ひきとめて泊まらされる。

神娘は瑞安県の城内に入った。瑞安には太陰宮が多くある。

## 台詞

神娘は一軒の家で遊ぶと、その家は、「神娘はこの瑞安に留まって、一年か半年遊んで見ないか。」と言う。「留まらない、道中妖怪退治して人を助けなければならぬ。師に言つけられた。」「そうか、一ヶ月か半月でもいいだろう。この瑞安には、お金はたくさんないが、人間が元気だ。食物もある！家の孫たちは頭が禿げているから、水薬でもあれば、少しもらいたい。」

神娘は、自分が盧山の法で妖怪退治はするが、水薬は持っていないと思うと、小包みの中から一枚の紙を取出して、疫病払いの呪文を唱えながら、子供たちの頭の上に擦付けてやった。直ちに、その頭の上に黒くて、つやのある髪の毛がいっぱい生えた。皆は神娘が立派な方だと絶えず称えた。

「瑞安の人たちは目上の方が目上の人らしく、後輩も後輩らしく、兄が兄らしく、弟が弟らしい。瑞安の人たちはこんなに目上の人に孝行するのだ。わたしはこれ以上外で妖怪退治してはいけぬ。わたしは家に帰って親孝行したい。」と神娘は言う。

神娘は汪、楊の二将を盧山へ帰す。「お二人の将！」「はい！」「お二人は盧山の洞に帰りなさい。わたしは家に帰って親孝行したい。」

## 歌う

内壇小衆神両駕、汪、楊の二将は盧山に帰った。

師の門前で守衛し、その地の人たちを庇護して、太平を保つ。

神娘は瑞安県を離れ、瑞安の百姓はお見送りする。

神娘は飛雲渡に来た。飛雲渡には妖怪が現われた。

この地に現われた妖怪は他のものでなく、蝙蝠の妖怪だ。

黒宿嶺で陳神娘は占いを誤ったので、蝙蝠は飛雲江まで逃げて来た。

聖母がすぐ来ることを知って、蝙蝠の妖怪は一艘の渡し舟に化けて埠頭で待つ。

## 台詞

「わたしの帰郷を知って、渡し舟がそこで待っているのね！」と神娘は言う。

## 歌う

神娘は埠頭で渡し舟に乗って、渡し舟は速く進んで行く。

舟が川の中でひっくり返って、聖母は飛雲で災に逢った。

災に逢ったしるしとして一本の線香を口でかむと、そのかおりが盧山の後の洞

門までとどいた。

盧山の師の奥さんは占いを行って、神娘が飛雲にいることが分った。

歌う

遣わされた汪、楊の二将は、二羽の水鶏に化けて、口で竜のひげの蓆を衡えて、神娘を埠頭まで載せた。神娘は埠頭から上がって行くと、宿屋の雄鶏がコケッコー、コケッコーと鳴き出した。「わたしは災に逢っても、お前は助けてくれないのに、かえってわたしを笑うのか。」と神娘は言う。